『緋文字』の曖昧性

野　呂　　浩*

Ambiguity of *The Scarlet Letter*

Hiroshi NORO

The ambiguity of Nathaniel Hawthorne's *The Scarlet Letter* has allowed scholars to produce a large number of different interpretations. Still, the possibility exists for new readings of this work to provide us with further interpretations.

This paper first analyzes Arthur Dimmesdale's sickness from a medical point of view and concludes that he can indeed be thought of a very seriously ill patient, with symptoms ranging from those of a psychosomatic disorder, depression, and a personality disorder.

The cause of such a disease cannot be found by merely examining his physical symptoms. It is absolutely necessary that one takes into consideration his mental symptoms as well.

One very clear fact that emerges is that Dimmesdale has been tormented by a unique conflict that exists between his biological nature and the spiritual and religious values of the New World. Although at one point he tries to escape from Boston with Hester, at the very end of the story he chooses instead to die on the scaffold after giving a final confession to the people. Hester has returned to Boston after living in England with her daughter, Pearl. Dimmesdale and Hester are taken to be tragic victims of the colonial values of Puritanism. However, in contrast to the fate that befalls Dimmesdale, Pearl lives on happily, not in Boston but in England; a fact which suggests Nathaniel Hawthorne's longing for his British heritage.

In conclusion, although nobody can deny that this work is a descriptive account of sin and the effect it has on the characters' lives, my new reading suggests that the work can be read in an entirely different way; a way which describes the experience of immigrants in two different cultures, namely, the values of a colonial Boston in contrast to those of Elizabethan Britain.

I

ナサニエル・ホーソーンの代表作『緋文字』は，これまで様々な視点からの読みがなされてきた．しかし，主要登場人物だけに絞っても，まだ新たな観点から解釈できる曖昧性，多義性を秘めている作品である．今回の研究では，ディムズデイルが，心身のバランスを極度に崩した病人であることに着目し，主にその病根を分析し，『緋文字』の新しい読みの可能性を探るのが目的である．

作品の主要人物達と言えば，まず，英国から当代一流の学問を身につけて植民地ボストンに，海を超えて渡って来たディムズデイル青年牧師，彼と不倫関係に陥ったヘスター・プリン，それに，二人の愛の結晶，「真珠」という名のパール，そして，これまた同じように英国からであろうが，ヘスターより遅れて植民地ボストンにようやく辿り着いた，ヘスターの法律上の夫，チリングワース

* 東京工芸大学工学部基礎・教養教授
1999年9月10日受理

である．この4人以外の登場人物達は，史実と極端に異なった描かれ方はされていないようである．作者ホーソーンは，Cale Hopkins Snow の *A History of Boston* に書かれてあるボストンの様子を借用しているようである．ヘスター，ディムズデイル，チリングワース，それにパールも全くモデルがない訳でもなさそうだが，この主要な4人の人物は，作者ホーソーンの想像力で創造された人物達であると理解して間違いない．

物語の舞台は，17世紀の植民地ボストンである．町ができてから15年か20年経った頃の話と書かれてあるので，1645年から50年頃の時代背景と考えて間違いなかろう．植民地ボストン住民の誰もが敬愛して止まないディムズデイルは，病弱体質の人間である．彼の内面も，環境の影響をもろにかぶるような，純粋で，ひ弱な人物である．肉体的な痛みだけでなく，何らかの精神的苦痛を懸命に耐えているかのように胸に手を置くのは，ディムズデイル独特の仕草である．物語の最終場面では，ディムズデイルは，さらし台の上に，ヘスターとパールを一緒に立たせ，自分の不義の罪を公衆の面前で告白し，息絶えてしまうのである．

このディムズデイルは，自分が住む環境に適応できなくて，神経症を煩う環境不適応の人間であろう．チリングワースは，衰弱しているディムズデールのために，特別に天から遣わされた医師であるとボストンの人々に認められ，このような弱々しいディムズデイルの健康管理を任せられることになる．そのチリングワース医師は，ディムズデイルは，ひどい病人であると診断している．

II

チリングワースは，マサチューセッツ湾植民地に姿を現す前に，インディアンに捕らえられ，そこで薬草治療などの知識と技術を習得したようである．そのチリングワースが，植民地ボストンで最初に目にするのは，妻ヘスターが赤子を抱いて，罪人を衆人の冷たい視線に曝す目的で使われてきたさらし台に立たされている，信じがたい光景であった．やがて，彼は，ヘスターと会うが，勿論，ヘスターは子供の父親を彼に明かさない．しかし，ディムズデイルこそ，ヘスターのパートナーであろうということを，チリングワースはうすうす嗅ぎとっているようである．チリングワースは，ディムズデイルの不義を世間に暴露せず，じわりじわりとディムズデイルを苦しめ，痛め付ける復讐にのみ生きがいを感じる悪魔的人物に変身していく．自分がヘスターの夫であることは，ディムズデイルには勿論のこと，世間に絶対に漏らさないようにと，執拗にヘスターに迫る．

人間の肉体的機能の研究のみに没頭していたためか，いつの間にか人間を一つの物質的存在と看做すようになり，もはや，「精神的存在とは認識できなくなってしまった」[1] チリングワースである．しかし，彼は，牧師の内面にこそ本質的な問題が潜んでいるのではないかと疑い，ディムズデイルの心の発掘にもとりかかる．その結果，「実に珍しい症例であり，魂と肉体の間に奇妙に密接な関係があり」(136)，精神の痛みがすぐさま肉体上に適切な姿をとって目に見えるようになるということに気付く．

このように，ディムズデイルの肉体は，精神と一体化しているので，たとえ，肉体的苦痛の症状のみ打ち明けられたとしても，病気の半分しか分らないので，病気の根源を捕らえることが出来ないのではないかと，チリングワースは恐れている．

チリングワース医師は，猛毒を有する薬草（毒草）を使って，ディムズデイルの弱った体の治癒に専念してはいるが，チリングワースの真の狙いは，ディムズデイルの病気治療にあるのではなく，ディムズデイルの精神状態を攪乱させ，潰滅させることのようである．

III

社会の法律に従わず，自由な生き方をする傾向の強いヘスターの手によってではなく，パールを彼女から引き取り，キリスト教的環境の中で育てるべきであると，長老達は提案する．これに対して，母親ヘスターから絶対にパールを引き離してはならないと主張する時のディムズデイルは，青ざめた顔で，手を胸に置き，憔悴しきって，苦悩を抱えている目つきをしているのであった．この

胸に手を置く,「時には,激痛におそわれたかのように,心臓のあたりをぎゅっと手で握る」(132) ディムズデイルの仕草は,生涯続く特徴である.

チリングワースがディムズデイルに,アトロピンという毒が含まれている有毒植物から毒薬を創り,その毒を飲ませ,その毒が引き起こす狭心症ゆえにディムズデイルが胸を手で押さえる.ディムズデイルが,夜空にAの文字を見るのは,この毒が効いて視覚障害になっているからである.それに,ディムズデイルの声の震えは,毒で唾液分泌が抑制されるための言語障害症状である.このような解釈を,ミズリー大学医学部医師,Jemshed A. Khanが,1984年に発表している[2].ホーソーンは,セイラム図書館から借りたJames Sowerbyの *English Botany* 第9巻(1799)から,有毒植物に関する情報を得たようであることも,Khan氏が論文の中で指摘している.

現職医師の診断で,文学研究者の解釈とはひと味違う刺激的な見解である.しかし,ディムズデイルは,チリングワースとの接触が始まる前から既に,手を胸に置く仕草をしている訳で,毒殺論と矛盾するような箇所をも見落としてはならないだろう.

さて,ディムズデイルの心身の病状を,現代医学の知識を借りて,文学研究者ではあるが,医学には全くの素人である私が医師の真似事をして診断してみよう.

まず,ディムズデイルは,心理的,社会的ストレスが主な原因で身体疾患を引き起こしている心身症ではなかろうか[3].また,うつ病の可能性も否定できまい.うつ病は,ごく軽いものから,自殺に結びつくような深刻なものまである.ディムズデイルも,この病気の疑いが濃い.うつ病とは,元気がなくなる感情の病気であり,具体的な精神症状としては,無気力,決断ができない,罪悪感,自責感,自殺念慮などである.身体的な症状としては,急激な体重減少,胸部圧迫感などである[4].とするならば,日に日に身体が痩せ衰え,胸部を手で押さえ付ける仕草をするディムズデイルの特徴とぴったり一致するではないか.うつ病になりやすい性格の人は,どちらかと言うと,柔軟性や適応力があまりなく,生活上の変化や秩序の変化に左右されやすい.たとえば,愛情関係のもつれなどもその原因になりうる[5].こうした内容も,何やら,ディムズデイルの性格と,弱っている根本原因を的確に説明しているような気がするではないか.

心身症患者は,一見すると,特に目立つような問題もなく,環境にうまく適応しているのではないかと思われるケースもあり,外見上,つねにイライラが目立つ,いわゆる神経症患者とは異なる.胃潰瘍が,胃に起きた心身症であるとするならば,うつ病は,脳に起きた心身症であるとの仮説も,ディムズデイルの病気診断にあてはめたくなる説である[6].また,患者は,自分の感情を認識してはいるが,それを素直に語ることができなく,つまり,言語化できなく(ディムズデイルの場合は,ヘスターとの不義の関係以後,自分の内面がどのように苦しみ,変化しているのか認識してはいるが,躊躇せずにすぐに公に自分の言葉で言い表わすことができなくて苦しむ),その苦悩が身体化している病状とも読める[7].

ディムズデイルは,罪ほろぼしのためか,自らの身体を鞭打つ.さらに,断食も膝に震えがくる程までする.その上,徹夜の勤行もする.そうすると,頭脳が錯乱して,幻が眼前にちらつくようになる.若い時代に死んだともがら,父親や母親も現れる.これは自分の身体を傷つける自傷行動である.自殺も,自傷行動の一つであるが,ディムズデイルの死も,そのような死なのであろうか.

IV

チリングワース医師や,Khan医師にはとてもかなわないが,少なくとも,素人医師の診察でも,ディムズデイルという人物は,複数の病名をつけてカルテに書かざるを得ない,誠に複雑きわまりない病人であること位は分る.何とか,病気の根本原因を突き止めて,病気を直してあげたいのだが,しかし,外側から視覚的に認識できる身体症状だけをいくら正確に理解しても,チリングワース医師も述懐しているごとく,病気の真の原因を特定することは出来ない.

一読者として，比較的容易に想像できる，ディムズデイルの病気の原因は，愛情関係のもつれなども心身症の原因になることがあるとすれば，ディムズデイルの場合は，ヘスターとのたった一度だけの不倫関係が世間に知られることを恐れる心がまず病根と考えられる．

しかし，果たして，それだけが唯一の病根なのであろうか．ディムズデイルの気質は，生まれつき神経質で，到底自由思想家などにはなれない，秩序を重んじる人間である．チリングワース医師は，ディムズデイルの身体が衰弱していくのは，ディムズデール特有の活発な思考と想像力，鋭敏な感受性にあると考えている．さらに，ディムズデイルは，精神性ばかりの実に清純な人間と人々に思われ，慕われているが，実は両親から，強烈な動物性 “a strong animal nature” (130) を貰い受けていることをも，チリングワースは見抜いている．

しかし，問題視しなければならない特質だけが，ディムズデイルの内面世界に蠢いているかというと，決してそうではない．健全で，自己犠牲的な宗教的慈愛こそが，ディムズデイルの本質であるとも述べられている．生まれながらの性格で，ディムズデイル程，真実を愛し，虚偽を憎む者はなく，そうした特徴がことの他顕著な故に，彼は，おのれ自身を一番憎む人物である．医師チリングワースが，ディムズデイルの動物性を確認するために，ディムズデイルの内面を探ってみたら，人間にたいする高貴な思い，魂に対する愛，清純な感情，神を敬う心のみしか見えなかったのである．

ディムズデイルは，自分は薬は必要無いとチリングワースに頑固に断わっている．もし，ディムズデイルの死は，チリングワースの計画的犯行（毒殺）とするならば，ディムズデイルの死際に，チリングワースは，勝利の笑みを浮かべてもよさそうなものだが，ディムズデイルに駆け寄り，自分の身を滅ぼす馬鹿な真似はやめろと止めに入る程である．従って，こうした場面からも，チリングワースによる毒殺論は，やはり，少し無理な読みと言わざるを得ないのではなかろうか．あるいは，当のチリングワースさえ知らない内に，飲ませていたかも知れない毒が効いた結果と推論したらさらにユニークな解釈となろうが，実証することは不可能である．

自殺は一種の自傷行動，うつ病の一症状であることは既に触れたが，ディムズデイルにもこのような事が本当にあてはまるのであろうか．ディムズデイルが，死を願い，また，予感していたふしは確かにある．チリングワースには，自分の肉体が死に，天に魂が戻ることを切に願っていると語っている．選挙祝賀の説教の際には，すでに，自分の死が近いことを悟っており，最後のさらし台の場面では，ヘスターに，自分の罪は自分で引き受けて死ぬのだと，明確に，死ぬ意志と，死の意味をさえ語っている．聴衆の前で，荘厳で，威厳に満ちた声で語り始めたが，ディムズデイルの声は絶えず小刻みに震え，痙攣的な動作で，最終的には，自分のたれえりを胸から引きちぎって崩れ落ちるのである．このような経緯を文字通り読むと，ディムズデイルは，自分の死の到来を自覚し，願っていたのだから，一種の自殺，あるいは，自死と理解したくもなる．

死際の，神の御心をなしたまえという，ディムズデイルの今際の祈りも，実にすばらしいキリスト教的救済の瞬間と理解したくなる．聖なる瞬間のごとく描かれていることは誰もが理解できるが，ほぼ同じ瞬間に，生命の灯が消えてしまうことも見逃せない事実なのだ．

動物性ゆえに姦淫の過ちを犯してしまったディムズデイルの悲しい性，その不義を共に体験したヘスターに対する，植民地ボストン社会の冷酷無惨な裁きなど，ピューリタニズム社会の病的特質とも呼びたくなるような諸々の特徴と絡めながら，ディムズデイルの衰弱ぶりと死を見つめ直すと，ディムズデイルが生来受け継いでいる心身の力を，徐々に弱め，やがて消し去る毒薬の働きをしているのは，ディムズデイルが，植民地ボストンの価値観世界に住むが故に体験せざるを得ない，熾烈な内面的葛藤であると結論づけられよう．勿論，これは，ディムズデール一個人の心身のみを狙って殺す特殊な毒ではなく，17 世紀植民地ボストン，ピューリタン社会の毒的特質を劇的に，

ディムズデイルに負わせているのである．

V

『緋文字』という作品は，姦通小説であり，Aは英語のAdulteryの頭文字であるとの読みは，特別な説明を要しないだろう．心理分析のFrederick Crews[8]，神話的解釈のHugo Mcpherson[9]，最近はfeminism的解釈が盛んである．さらには，既に触れたように，チリングワースによる毒殺説を主張する読みなどもある．勿論，この他に，とても全部は数えきれない程の研究成果が発表されている．それらがすべて，作品解釈の歴史に新しい頁をつけ加えてきたことは評価に値しよう．勿論，私はこれまでのすべての研究成果を読破した訳ではないので，多少の独断と偏見があることを認めた上でのことではあるが，様々なユニークな解釈を読む際にいつも覚えさせられるのは，物語の全体像を視野に入れて解釈する基本を逸脱しては，物語の一面をより詳しく理解，説明できても，全体の有機的関連を見落とす危険性が伴うのではないかと危惧することである．

この物語の舞台が，17世紀の植民地ボストンであるということだけで，歴史小説であると看做すことは無論，無謀である．ホーソーンも，自分の想像力を駆使して創造した作品であると明言している．しかし，過去の歴史を舞台として利用していることは紛れもない事実である．ホーソーンの先祖には，歴史上の痛ましい事件としてよく知られているセイラムの魔女裁判等に関わった者もあり，その消しがたい歴史的汚点をホーソーンがことのほか気にかけていたことも事実である．其れ故，このような物語を執筆する背景には，直接の言及はないが，こうした作家個人の家系の歴史を忘れられない事情もあろう．作品を注意深く読むと，そのような痕跡は皆無であるが，植民地ボストン文化と，ヨーロッパ文化（特に英国文化）との比較考察的記述が結構多いことに気付く．

ディムズデイルは，英国の名門オックスフォード大学出身の，聖人視される人物である．ヘスターは，物語の冒頭の場面で，パールを胸に抱いてさらし台に立たされた時に，厳しい現実を直視できないせいか，まず思い出すのは，他でもない，彼女が生まれ育った祖国英国のことである．当然，チリングワースも，英国出身と考えて差し支えあるまい．そして，敢て，言及するまでもないことではあるが，植民地ボストンの住民はイギリス人であり，エリザベス朝時代の文化の影響に触れている箇所なども多くある．

ヘスターが，ディムズデイルに，ボストンから逃げなさいと勧める際に言及する具体的な逃亡先として，ロンドン，ドイツ，フランス，イタリアなどをあげているのも如何にも意味ありげではないか．そのような文明世界に脱出して，学者なり，聖者となって活躍しなさい，とヘスターがしきりにディムズデイルを誘うのである．インディアンの小屋か，海岸ぞいに散らばる小数の居住地しかないニューイングランドやアメリカ全土よりは，都市があり，人が多く住む旧世界の方がはるかにいいという点で，ディムズデイルとヘスターの意見が一致することも重い意味を持とう．このように，大事な場面では，必ずと言っていいほど，旧世界（特に英国）に言及している．

植民第一世代のことを露骨に批判しているような描写はない．植民第二世代から堕落の傾向が見られることは，物語の中にも述べられている．主要登場人物の三人（チリングワース，ヘスター，ディムズデイル）は，植民地ボストンの第一世代を親として，ボストンで生まれた人物達ではなく，全員ボストン以外の国，はるか遠くの英国から，ユートピア的国家を建設するために，それこそ死の危険を伴う長い航海を経て植民地ボストンに辿り着いた訳だから，彼ら自身も一世なのだ．これも意味ありげな設定ではなかろうか．とするならば，一種の移民史物語と読める可能性がある．ホーソーンは，移民の歴史そのものを描いているのでないことは当然である．エリザベス朝時代の価値観世界で育った人物達が，全く新しい世界である，植民地ボストンの価値観の世界に上手に適応していくどころか，逆に，その価値観に弄ばれ，犠牲者となる悲しい運命を，ホーソーンの想像力を駆使して作品化した物語と読めるのである．

それでは，ディムズデイルやヘスターの移民意

識などについて，作品中のどこかに具体的に述べられているかというとそうではない．姦淫のシーンが描かれていないのと同じように，特に具体的な言及こそないが，新たな価値観の世界を求めて，命がけで，ボストンに辿りついた人物達のドラマであることが大前提となっているのである．特にわざわざ語る必要がない大前提だからこそ，語られていないのだ．

新しい価値観の世界へ同化していく際の苦悩を一番劇的に背負わされているのは，既に触れたように，ディムズデイルである．息苦しい程の辛さからの逃亡，つまり，植民地的価値観からの逃亡をヘスターと一緒に計画し，船の予約までするが，最後は，やはり，ボストンの価値観（ピューリタニズムと言い換えてもよかろう）に死ぬ，別な表現をするならば，植民地ボストンの価値観に，敢て，ホーソーンが，ディムズデイルを殉死させているのだ．

植民地ボストンの精神的，宗教的価値観が，ディムズデイルの心身を蝕むプロセスが克明に描かれていても，全く，自業自得であるかのような感じはなく，そこに，異なる環境の価値観に翻弄され，飲み込まれていく悲劇的体験に対する作者の共感の眼差しを読み取れる．

ディムズデイルの死後，彼を苦しめる生きがいそのものを喪失してしまったチリングワースは，やがて萎むように死んでいくのも納得できる．その後，ヘスターは，一旦は，英国に娘パールと一緒に戻ったが（愛するディムズデイルと一緒ではなかったが，ディムズデイルと実行を計画した逃亡を実体験したことになろう），また，自分が辛酸をなめつくした地，植民地ボストンに，彼女自身の意志で，帰ってくるのである．あれ程苦渋をなめた植民地ボストン社会に，何ゆえまた帰って来たのであろうか．ディムズデイルを想う気持ちもあろうが，兎に角，植民地ボストンに骨を埋める覚悟で戻ったことだけは確かである．

一度は捨てた懐かしい祖国に戻ったが，また，再びその祖国を離れて植民地ボストン社会に帰ってくる痛々しい決断を，ホーソーンがヘスターにさせている．ヘスターの痛みを幾分でも和らげるためか，ホーソーンは，彼女が，やがて，悩みを持ち苦しむ方々のカウンセラーとなり，A の文字の意味も，Able の A に変わっていく過程を描いたのであろうか．そのヘスターも亡くなると，ディムズデイルとはまるで混じる権利がないかのように，ある距離をおいて埋葬されたと記されてある．ピューリタン社会のこうした冷たさも，悲しみの深さ，重みを伝える上での役割を果たしていることになろう．しかし，墓石は一つであるので，二人の繋がりを多少は理解してくれた処置とも解釈できよう．いずれにしても，結果的には，ディムズデイル同様，ヘスターをも，植民地ボストン的価値観世界の土に，ホーソーンが葬らせたことになる．

ところで，この作品の題は定冠詞がついている緋文字である．これは，ヘスターが胸につけざるを得なかった姦淫を意味する文字の頭文字，あるいは，Able, Angel の頭文字，または，アトロピンの A，あるいは，実際にあったのかどうかは誰も分らないが，ディムズデイルの胸にあったかも知れない文字などと読めよう．

パールは，「生ける緋文字」であると描かれていることから，定冠詞で限定される緋文字は，実はパールであるとも読める．とするならば，物語の主要登場人物の中で唯一生き残った人物パールが，より自由主義的な英国的価値観の世界で生き続けていることに，特別な意味はないなどとは言えないだろう．パールは，英国的価値観の世界に戻ったからこそ幸せな生活をしているのだとの解説的説明はないが，パールが英国で幸せに暮らしていると，さりげなく述べられているそのことが，何よりも雄弁に物語るではないか．

（この物語との直接的関連性はないが，ホーソーンが，パールのモデルにしたと言われるホーソーンの長女ユーナは，現在，ロンドン郊外のケンザルグリーン墓地に眠っており，何やら不思議な思いがする．）

この文学作品『緋文字』は，罪とその結果，あるいは，むしろ，罪の結果生じる罪意識を主題としたものであることを疑う人はほとんどいない．しかし，私が今回主張した新たな視点で読み直す

ならば，全く別なテーマを扱う作品とも読める程，曖昧性，多義性に彩られた傑作であることに改めて驚きを禁じ得ない．

注

1) *The Centenary Edition of The Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State Univ Press, 1962-), I, p 119.

本稿の Hawthorne の作品からの引用はすべてこの版による．以下，*The Scarlet Letter* からの引用は頁数を，括弧に入れて示す．

2) Jammshed A Khan, 'Atropine Poisoning in Hawthorne's *The Scarlet Letter*' *The New England Journal of Medicine*, Vol 311, No 6 (Aug. 9, 1984), pp 414-416

3) 柏瀬宏隆『心の医学』朝倉書店，1997 年，p 77

4) 『心の医学』pp.50-51

5) 『心の医学』p 52.

6) 『心の医学』pp 81-82

7) 『心の医学』p 81.

8) Frederick Crews, *The Sins of the Fathers* (Los Angeles. University of California Press, 1989)

9) Hugo Mcpherson, *HAWTHORNE AS MYTH-MAKER* (Toronto. University of Toronto Press, 1969)